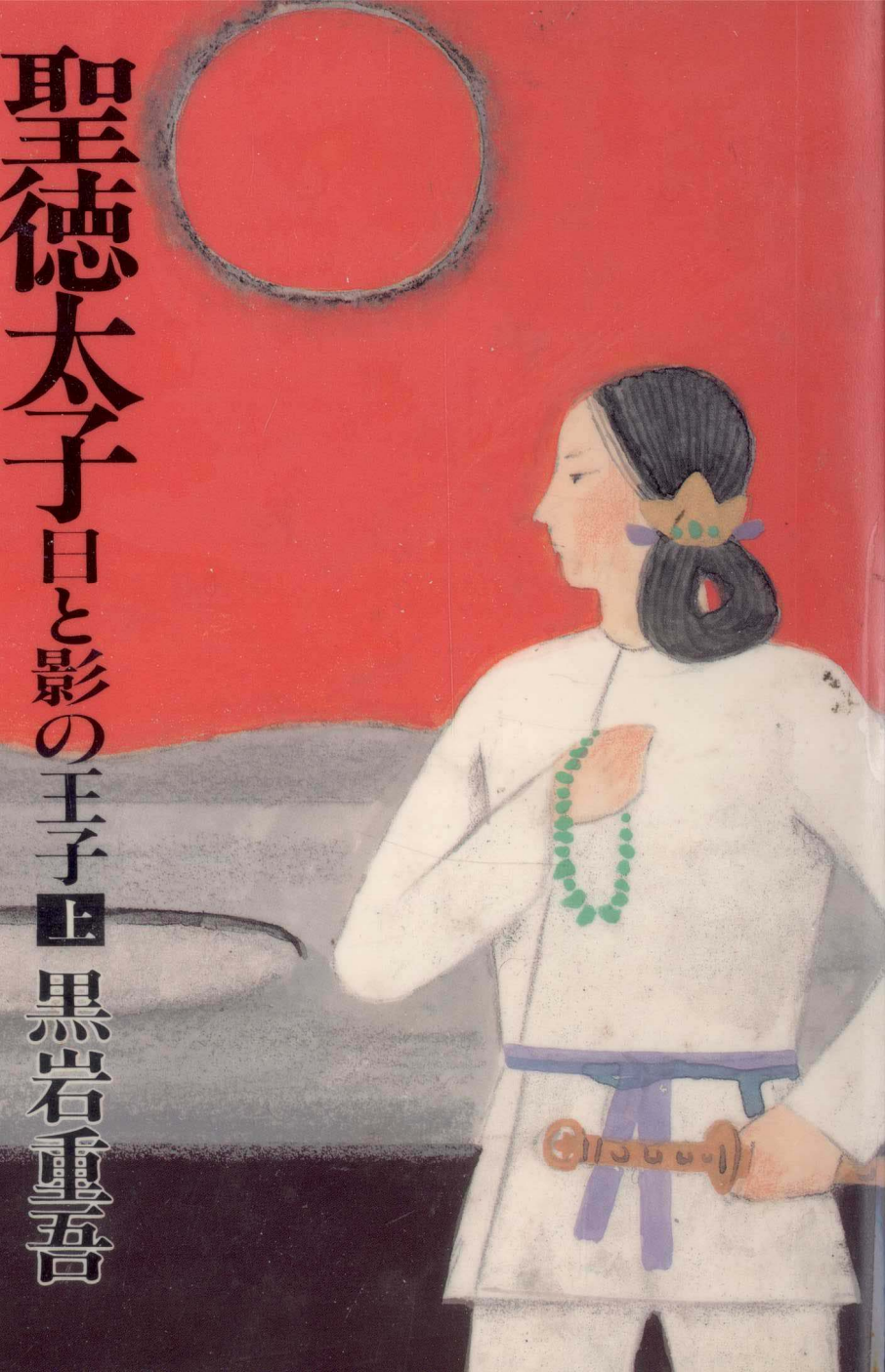


聖徳太子 日と影の王子 上 黒岩重吾



# 聖徳太子

日と影の王子

黒岩重吾

江苏工业学院图书馆  
藏书章

上

文藝春秋

聖徳太子——日と影の王子 上

一九八七年六月三〇日第一刷

一九八七年八月一日第二刷

定価 一七〇〇円

著 者 黒岩重吾

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三  
電話(〇三)二六五―二二二

印刷 大日本印刷  
製本 中島製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

ISBN4-16-308670-1

〈目次〉

物部合戦

7

夜明けの前

103

春雷

232

別離

362

陽光の季節

543

## 〈主要登場人物〉

うまやどのみこ

厩戸皇子(聖徳太子)

橘 豊日大王(三十一代用明天皇)

とあらばなのとよりのおおきみ

あなはべのはしひとのひめみこ

穴穂部間人皇女

厩戸皇子の母。

のち田目皇子と再婚する

蘇我馬子

大臣。

蘇我稲目の子

刀自古郎女

蘇我馬子の娘。厩戸皇子と結婚する

秦河勝

山背の豪族。

厩戸皇子の舎人の長

迹見赤檮

倭国一の武人。秦河勝の後を継いで厩戸皇子の舎人の長となる

豊御食炊屋姫(額田部皇女)

淳中倉太珠敷大王(三十代敏達天皇)の皇后。

後の三十三代推古天皇

菟道貝蛸皇女

豊御食炊屋姫の娘。厩戸皇子の正妃となる

泊瀬部皇子

穴穂部間人皇女の弟。のちに即位して泊瀬部大王(三十二代崇峻天皇)となる

東 漢

直駒

蘇我馬子の警護隊長

竹田皇子

豊御食炊屋姫の病弱の皇子。菟道貝蛸皇女の兄

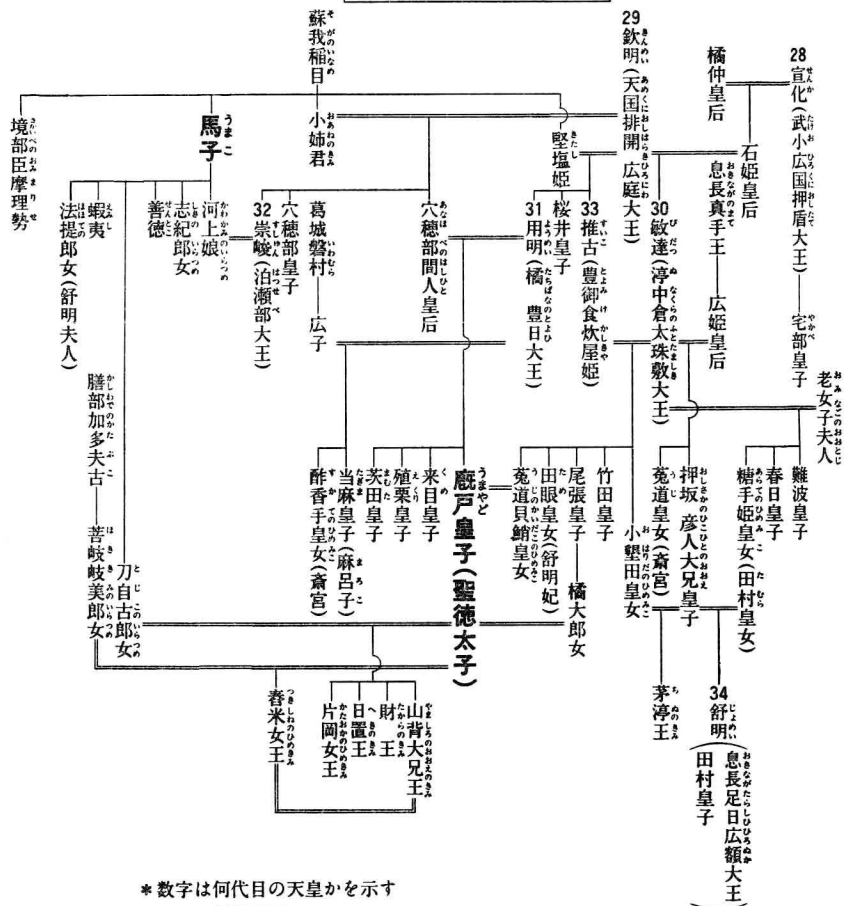
恵便

高句麗僧。厩戸皇子と蘇我馬子の師

慧慈

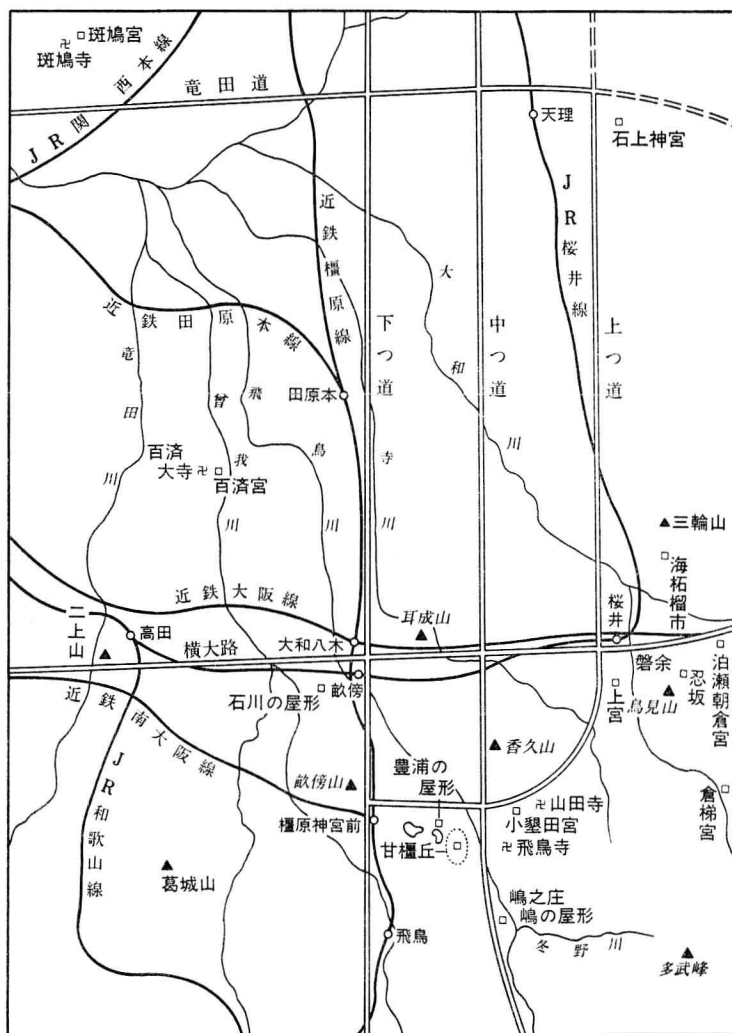
高句麗僧。恵便の後を継ぎ、厩戸皇子の師となる

# 聖德太子關係系図



\* 数字は何代目の天皇かを示す

\* ——は婚姻関係



聖徳太子——日と影の王子 上

装画  
守屋多々志  
A D  
栗屋  
充

## 物部合戦

西暦五八七年旧暦七月初旬は残暑が厳しかった。烈日は人々の肌を灼いている。

大和平群郡と北葛城郡の境を流れる大和川の水流も例年になく少なくなっていた。

竜田川の西南の大和川沿いに二千の兵士達が布陣している。隊長達は五世紀時代から家に伝わっている鉦留めの短甲や、六世紀になって騎馬戦のためにつくられた挂甲（無数の鉄の小札を皮紐でつないだよろい）を被っているが、兵士達は皮甲や板甲を外し半裸になっていた。

兵士達といってもほとんど農民で豪族達の私兵であった。なかには全裸になり大和川で水浴びをしている兵士達もいた。兵士達は集められた仲間があまりにも多いのに仰天し、驚喜し、戦の勝利を信じて疑わなかった。だから明日の戦闘のために布陣しているのだが、あまり緊張感はない。隊長達の中にも、先軍の阿倍臣人、平群臣神手、坂本臣糠手、春日臣などが率いる軍勢だけで勝敗のかたはつくと気易く考えている者も多かった。

何といつても敵は大連物部守屋の軍勢だけである。いくら武勇を誇る軍事氏族であっても、大臣蘇我馬子を総帥とする大和朝廷軍は、その数において物部軍の数倍に達していた。

今大和朝廷軍が布陣している場所は河内と大和をつなぐ竜田道を押える要衝の地である。西北には信貴、生駒連山が、南西には二上山系の北端の山々が連なっている。

大和川を武器や食糧を積んだ小船が次々と下って行く。水量が少ないといつても小船を運ぶだ

けの深さはある。

百濟くだら、新羅しらぎ、高句麗こうくりなど三韓の使者も難波の館（大阪城近辺）から水路を利用し大和川に入り、川をさかのぼって大和に達するのが通例だった。

時には、当時の倭国最大の市場である海柘榴市（桜井市戒重）まで船で来ることもあった。二上山系を横切る竹内峠と共に竜田道は河内と大和を結ぶ二大交通路である。ただ竹内道はまだ本道ではない。

全裸で川につかりふんどしを洗っていた三十前後の男が、半裸で水を浴びている若者に話しかけた。

「わしは秦河勝はたのかかつ様に仕える者じゃ、おぬしはこの近くの者か？」

「そうよ、わしはこの近くの斑鳩いかるがの里に住む者じゃ、わしの主君は膳臣かしわてのおみ加多夫古様よ、わしは奴やつこだが、この戦いくさで大手柄を立て加多夫古様に認めて貰うつもりじゃ、これでも弓矢の腕では隊長にも負けぬ、それはそうとおぬしの主君の秦河勝様は何処いずこの豪族じゃ？」

「山背やましろの秦様を知らぬのか？」

「山背？ そんな遠いところの豪族など知る筈はない、しかし、山背の人がどうして大和の軍勢に加わっているのじゃ？」

と若者は不思議そうに訊いた。

無理もない。六世紀末の奴階級の政治や地域に対する認識はこの若者程度であった。

「知らぬのか、秦河勝様は厩戸皇子うまやどのみこの舍人とねりの長よ」

三十男は誇らし気に立ち上がった。

大和川沿いに布陣している兵士達の主君は老伴おとものむらじくい連嚙かしわてのおみ、膳臣かしわてのおみ加多夫古かたぶこ、葛城臣かつぎのおみ烏那羅うなろ、紀臣きのおみ男麻呂おまろ、巨勢臣こせのおみ比良夫達ひらぶで、いうまでもなく畿内の有力豪族であった。

大伴氏は欽明朝に、朝鮮半島との外交問題で失敗し、その勢力は衰えたが、名門氏族として他の諸豪族におとらない力を保有していた。

なお、紀臣男麻呂、巨勢臣比良夫の別働隊は竹内峠を押える要衝の地、当麻附近に布陣している。先兵はすでに竹内峠から河内に進撃を開始していた。

大和朝廷連合軍の総帥、大臣蘇我馬子は大和川と葛城川の合流地点、現在の王寺町に造った屋形の中で全軍の指揮を執っている。深紫の上衣に金冠を被っていた。当時はまだ冠位十二階制は出来ていないが、仏教とともに道教も倭国に入っていた。

古代中国の道教思想によれば、この世を天上から支配する天帝大皇は天の紫宮（北極星）に住んでいた。そういう意味で仏教とともに道教も学んでいる蘇我馬子は紫色を最高の色として尊重していたのである。

蘇我本宗家の主、馬子に仕える東漢氏が河内の前線から諸豪族の私兵が布陣している各地域を馬で走り、戦の状況や布陣の様子などを馬子に伝えていた。

東漢氏は五世紀に百済から渡来した氏族で蘇我本宗家を主君と仰いでいる。

馬子の本陣の周囲は武装した東漢氏の兵士達が守っていた。たんなる農兵と異なり武術の訓練を怠らないので、兵士達の眼光は鋭く動作は敏捷であった。

麻布の上に胡座をかいて坐った馬子を女人達が絹布や木の葉で作った团扇であおいでいた。馬子は五尺三寸という身長割には顔が大きく、その表情は茫洋としている。

馬の蹄の音が近づいて来た。数騎である。本陣の近くまで馬を乗り入れたのは東漢直駒であった。身長五尺七寸、体重は二十貫近くもある駒は東漢氏の中でも武芸の達人だった。特製の強弓で大鹿を一矢で斃したこともあった。挂甲で身を覆い長刀を吊した駒は馬子の屋形の入口に走り寄ると蹲った。

「東漢直駒、ただ今前線より戻りました」

駒の声は鐘も割れるほど大きい。

「どうじゃ、戦の様子は？」

と馬子は落ち着いた声で訊いた。

「吾君、物部の軍勢は意外に強く、いったん大和川を渡った阿倍臣人、平群臣神手の軍は現在、高井田あたりまで退却、また大和川の南方から石川を渡ろうとした坂本臣糠手は石川の東方で釘付けになり川を渡ることが出来ません、なお、石川の西北志紀郡には千に近い軍勢が旗をなびかせております、それに物部勢数百はホムタ大王（応神）の墳墓に陣取り、竹内街道の戦に備えています」

「駒、汗でも拭け、そちの慌てた様子を見れば全軍の士気に影響する」と馬子は一喝した。

馬子の傍には矢張り深紫の上衣と白いズボン様の袴姿の泊瀬部皇子（後の崇峻）が坐っていた。馬子が一喝する前に陽に灼けた泊瀬部の顔から血の気が消えた。泊瀬部は丁度三十歳だった。馬子はそんな泊瀬部を軽蔑の色を浮かべて一瞥した。

「泊瀬部皇子、皇子は物部守屋がそんなに恐ろしゅうござるか？」

「いや、恐ろしくはないが油断は大敵、大臣、物部氏は何といつても、倭国最大の軍事氏族ですぞ」

泊瀬部皇子は絹布で顔からしたたり落ちる汗を拭いた。泊瀬部皇子は天國排開 広庭大王（欽明）が馬子の姉妹小姉君に産ませた皇子である。皇子にとつて馬子は伯叔父にあたる。それだけではなく馬子は泊瀬部皇子の同母兄穴穗部皇子をこの六月に殺した。理由は穴穗部が額田部皇女（後の推古）に乱暴したのと、物部守屋に意を通じたからであった。物部守屋に意を通じる者は、

それが誰であっても馬子にとっては敵である。

馬子としては守屋を斃すためには、守屋を絶望的な孤立状態に追い詰めねばならなかった。穴穂部が皇子であっても、馬子には問題ではない。だからこそ馬子は、物部守屋に同調したという理由で、穴穂部や泊瀬部皇子の弟の宅部皇子まで殺してしまった。

泊瀬部皇子は傍の馬子に同母の兄弟を殺されたのである。泊瀬部皇子は馬子が恐ろしかった。自然、言葉も丁重になる。

額田部皇女という後ろ楯があったにせよ、皇子二人を殺した馬子に諸豪族が従ったのは、時の最高権力者が大臣馬子だったからである。

馬子は泊瀬部皇子を無視して立ち上がった。外に出た馬子を団扇を持った女人達が追う。本陣を守っていた東漢氏の兵士達が一斉に蹲った。

「駒、今は戦の最中じゃ、蹲っている間に敵が襲って来たらどうするつもりだ、戦の間は立礼だけで構わぬ、と申しただろう、命令が徹底しておらぬぞ」

馬子がにがにがし気な口調でいった。駒が慌てて、立て、立て、と怒鳴った。

馬子は大和川沿いに布陣している兵士達の主君を集めるよう駒に命じた。当時の農兵達の主君は大王ではなく、彼等に土地を与えたり、貸してくれている豪族だった。

駒は各豪族達が休んでいる本陣の掘立小屋を駆け廻り、大臣がお呼びです、と叫ぶ。同時に東漢氏の兵士達が鼓を鳴らした。

本陣は騒然となった。大伴、膳、葛城、紀、巨勢氏などの將軍、副將軍連中が急いで馬子のところへやって来た。

「今、東漢直駒から報告があった、物部勢は手強く、先軍は苦戦しておる、將軍、副將軍達はよろい<sup>き</sup>を被、布陣している兵士達を叱咤していただきたい、兵士達の中には川で水遊びをしたり、

女人を追いかけている者もいるようじゃ、明日の戦のために休息を取るのはよい、だが遊びに力を使っているのは、いざという時、役に立たぬ」

そのころ、数え年<sup>どしどし</sup>で十四歳の厩戸皇子<sup>うすのこみこ</sup>（聖德太子）は数人の舍人<sup>とねり</sup>に守られ、大和川の支流、葛城川沿いの草叢<sup>くさむら</sup>に坐り、紫色の袴をたくしあげ、脚を川水につけていた。

厩戸皇子も諸皇子と共に物部守屋討伐戦に参加していたのである。諸皇子をこの戦に従軍させたのは、全軍の士気を鼓舞すると共に、大王家の賊敵という烙印を守屋に押すためだった。

皇子の傍にたち、皇子を見守っているのは挂甲を被て槍を持った舍人の長秦造<sup>はたのみやとくあかつ</sup>河勝である。河勝はすでに二十歳の半ばに達していた。普通なら本拠地である山背<sup>やましろ</sup>の太秦<sup>うずまさ</sup>に戻ってもよい年齢だが、皇子の傍を離れ難く、皇子が住んでいる磐余<sup>いわのあま</sup>の上宮<sup>かみみや</sup>（桜井市上之宮）の傍に屋形を建て、舍人の長として皇子に仕えていたのだ。

皇子の表情が冴えないのは、この四月皇子を愛した父、橘<sup>たちばなの</sup>豊日大王<sup>とよひのおおきみ</sup>（用明）が亡くなったにもかかわらず物部守屋討伐戦に従軍するよう馬子から要請されたからである。誅<sup>しほ</sup>や喪<sup>もがり</sup>は馬子の命令で早く終ったが、父はまだ池辺<sup>いけのへ</sup>（桜井市阿倍）に造られた墳墓に葬られていない。殯宮<sup>もがりのみや</sup>に放置されたままである。厩戸皇子はせめて墳墓に葬られるまで喪に服していたかった。厩戸は母、穴穂部間人皇女<sup>あなほのうへひとのみかみ</sup>を通じて自分の意を馬子に伝えたが、軟弱なことをいってはならぬ、と馬子に一蹴<sup>いっさく</sup>されてしまった。

穴穂部間人皇女は馬子に殺された穴穂部皇子の同母姉妹である。また厩戸皇子の父大王は、欽明<sup>きんめい</sup>と蘇我稻目<sup>そがのいなめ</sup>の娘堅塩媛<sup>きたしひめ</sup>との間の皇子で、同母妹に額田部皇女<sup>ぬかたべのみかみ</sup>がいた。

そういう意味で、厩戸皇子の父にも母にも蘇我氏の血が流れている。それは厩戸皇子がどうすることも出来ない皇子の宿命であった。皇子の父母にとって馬子は伯叔父なのである。

厩戸皇子は不思議そうに二上山を眺めていた。ここから眺める二上山は飛鳥<sup>あすか</sup>や高市郡<sup>たかちのこおり</sup>の石川

の優姿が消えている、ということだ、雄岳だけが威張っているではないか、二上山というより一上山じゃ」

「北方から眺めているからです」

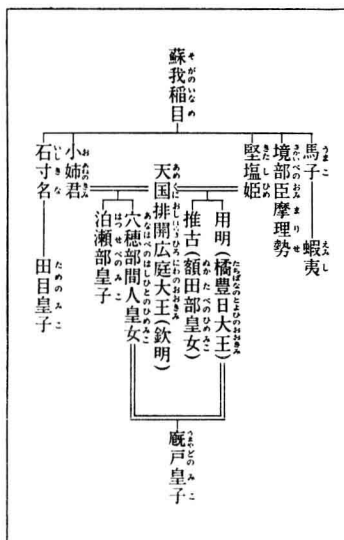
「そんなことは分つておる、山も別な場所から眺めると姿が変わる、人間だって同じだ、吾は大お  
臣が豊浦の近くの池で舟遊びをしているのを、甘樫丘の上から眺めたことがある、大臣は木彫り  
の人形のように小さく見えた、あの恐ろしい大臣がだぞ」

「皇子、滅多なことを……」

河勝は驚いて注意すると口を押えた。

空を舞っていた鳶とびが、川面に落下したかと思うと小魚を銜くわえ空に舞い戻って行った。

仲間がやられたにもかかわらず川岸の葦の中で小鮒の群れが戯れていた。水飛沫と共に一匹が跳ね上がり、陽光に煌きらめいた。



（榎原市）と違って雄岳がいやに大きく、雌岳は雄岳の後ろに隠れるようにひそやかに佇んでいるように思えた。

「河勝、あの二上山をしろ、何だか変だろう  
変に思わないか？」

と厩戸は河勝に訊いた。河勝には厩戸の質問の意味が分らない。時々皇子は少年に似ない奥深い質問をしたり、答えたりする。

「皇子、やつがれは変には思いませぬ」

「吾が申しているのは、飛鳥から眺める二上山

「心配するな、河勝、こういうことは今のところ、そちにしかいわぬ、ただなあ河勝、人の姿だけではない、視方みかたを変えれば性格や心まで異なつて見える、吾にはそれが面白い、獸が性格を変えるのは、飢えた時と襲われた時ぐらいじゃ、いや、子供連れの時も、いつもより殺氣立つ、ところが人間の場合は、初めから変え切れない性格を持つている人物がいる、あの雌岳が雄岳の後ろに隠れて見えにくいように、誠実の背後に不信と裏切りが寄り添つて立っている、だから人間は面白いのじゃ、吾にいわせると穴穂部皇子など、胸の中が見え過ぎて、まるで子供のようだった、あれでは大臣に殺されても仕方がない」

厩戸皇子は何でもないことのようにいった。河勝は槍を握り締めたまま石像のように立っていた。こういう時の皇子の話には、大人も及ばないような洞察力が感じられた。

「皇子はどういうところを子供のように思われたのですか？」

「この春だった、吾が上宮かみみやの南の丘で遊んでいると、穴穂部皇子が父の宮から出て来た、多分母に、吾の居場所を聴いたのであろう、馬に乗つて吾の傍に來た、昼なのに酒に酔っている、吾は松の木に登っていたが、降りて挨拶した、だが穴穂部は馬から降りようとしなない、確かに穴穂部は吾の伯叔父で、吾よりも年輩者だ、だが吾は大王わうきようの皇子で、父は吾を眼に入れても痛くないほど可愛がつて下さっていた、穴穂部にとって吾は重要な皇子なのだ、ところが吾が丁寧ていねいに挨拶しているにもかかわらず穴穂部が馬から降りないのは、吾を子供だと小馬鹿にしているからだだろう、大人と違つて、子供はすべて単純だと錯覚している、そういうところが穴穂部の阿呆なところだ、好い年齢なのに、一体何を學んで生きて來たのか、と吾は不思議だった、しかも穴穂部は酒臭い息を吐きながら吾に、皇子はあんな高い木に登つて、恐くないか？ と訊いた、恐くないから吾は木の上で戯れていたのじゃ、吾が少し恐い、と嘘をつく、と、そうだろう、落ちたら頭を打つて死ぬぞ、と満足そうに笑つた、その笑い方も何々大笑かかというやつじゃ、吾は穴穂部の大笑を耳に